

「日本樂府」について

土屋 博つちや ひろし

「樂府」は漢の時代に創まりたる歌曲の名称なり。後世其の音樂方面は廢れ、詩體のみ傳はれり。賴山陽（一七八一年生れ、一八三二年没）の「日本樂府」は文政十一年十一月の著作にして、樂府の形式をとりたる日本歴史名場面の詠史漢詩集なり。「日出處」より「裂封冊」まで六十六閱けつ、賴山陽の歴史觀をも反映す。六十六編あるは日本六十六國に拠る。

劈頭を飾る第一 「日の出づる處」は聖德太子を扱ひ、「日の出づる處、日の没する處、両頭の天子、皆天署す。扶桑は雞ないて朝すでに盈つるも、長安落陽は天いまだ曙けず。」に始まる。

第三 「炊煙起る」は仁德天皇を扱ひ、「煙未だ浮ばず。天皇愁ふ。煙已に起る。天皇喜ぶ。」に始まる。

第三十五 「蒙古來たる」は、元寇時の北条時宗を扱ひ、「筑海の颶氣天に連りて黒し。」に始まる。

第六十一 「本能寺」は、明智光秀の言葉、「本能寺、溝の深さは幾尺いくせきなるぞ。吾が大事をなすは今こんにあり。」に始まる。

掉尾を爲す第六十六 「封冊を裂く」は、明使を引見したる豊臣秀吉を扱ひ、「史官讀み到る日本王、相公怒つて裂く明の冊書。」に始まる。

手許の關係書籍以下の如し。

一「翻刻 日本樂府 賴氏藏版」賴久太郎著、牧輓信侯註

（翻刻人大坂府平民柳澤武運三、明治十二年翻刻刻成、本文廿四丁）

文庫版サイズよりは一回り大きく、和綴なり。「西京柴田彫」の印字あり。

註を施せし牧 信侯（一八〇一年生れ、一八六三年没）は山陽の門人なり。

二「日本樂府 完」山陽外史賴襄擬製、牧輓信侯註

（東京文學書院發行、明治四十三年刊、定價金貳拾五錢、六六頁）

和綴、「西京柴田彫」の印字あり。

三「新譯 日本樂府 全」大町桂月譯評

（至誠堂發兌、大正元年六版、三一六頁）

函入天金、新編翰文叢書第四編なり。桂月曰く、「日本樂府一篇、寥々たる一冊子なれども、其尊王愛國の精神の凝結したるもの也。言はゞこれ金剛石也。微片といへども、千金の價あり。以て山陽の面目を伺ふに足り、以て天下の士氣を鼓舞するに足る。」と。

四「賴山陽集」

（先進社、昭和六年刊、五三三頁）

大日本思想全集の一冊。日本外史論贊、新策、山陽文集、山陽書翰集、日本政記、日本樂府を含み、

極めて有用なる書籍。

五「詩吟の山陽詠史」木崎好尙著

(章華社、昭和十一年刊、定價壹圓貳拾錢、三二五頁)

緒説に曰く、「樂府は、山陽四十九歳の歳晚、前後三週間以内に稿了され、支那の管絃曲になぞらへて、我が史實にて作り上げ、そこに日本といふ特性を現はすべく、當時六十六州の數に配し、六十六を限り、筆を豐臣時代に止めたり」と。木崎好尙(一八六五年生れ、一九四四年没)は賴山陽研究の第一人者。

六「賴山陽詩抄」賴成一、伊藤吉三譯註

(岩波文庫、昭和十九年刊)

日本樂府のうち十五首を收録し、語釋及び附記を附す。

七「譯註 賴山陽詩集」安藤英男著

(白川書院、昭和五十二年刊)

日本樂府のうち十二首を收録し、語解、大意、余考を附す。

八「賴山陽『日本樂府』を読む 古代史入門」渡部昇一著

「賴山陽『日本樂府』を読む 中世史入門」渡部昇一著

「賴山陽『日本樂府』を読む 戦國史入門」渡部昇一著

(PHP 研究所、平成十八年刊)

平成二年刊「日本史の眞髓」(全三冊)及びそれを文庫化したる平成八年刊「甦る日本史」(全三冊)を改題し新書版としたるもの。

日本樂府全編の解説、逐語譯としてこれ以上懇切丁寧にして分かり易きもの無く、著者渡部昇一氏(一九三〇年生れ、二〇一七年没)の情熱を感じずんば非ず。(渡部氏とは、娘さんの旦那が後輩なりしこともあり、巴里駐在時にシャルルドゴール空港にて名刺交換したること、懐かしく想ひ出づ。)

帯に曰く、「日本の歴史に於いて特徴的な出来事を漢詩に結晶させた賴山陽の日本樂府、日本人に誇りと自尊心を與へたその歴史觀は明治維新の原動力となつた。戦後意圖的に歪められた歴史觀と歴史教育によつて片隅に追ひやられた日本史の眞髓に今再び光が當てられる」と。

その後、平成二十六年に PHP 文庫として再登場す。

(令和二年六月九日受附)